

有名キャラ官能小説CG集第314弾！！

キミの全力をいっぱい味わわせて！

女神の官能小説CG集

Win
95/98/ME

Win
2000

16 MB
Memory

800×600
65536 Color

CD-ROM

3.5インチ
1枚

CG集

成年向























「ふふふ、いいね。随分とコレクションの種類が増えて、嬉しいよ」

博士は驚くほど醜悪にほくそ笑んだ。

コレクションと呼ばれた者達は、当然その表情、そしてその行為に嫌悪する。

「なんなんだろうね、この人…“ここまでの事”を平然とやれるなんてさ」

ヒガナは周囲を見回しながらそう言った。

彼の“コレクション”らしきものがズラリと並ぶ様が、嫌でも目につく。

「そんな、私たちもあんな風にされちゃうって事!？」

恐怖と不安をあらわに叫ぶ声。だがそれも当然だ。

生きてるかどうかわからない無数の女の子達が居並ぶところに、自分も加えられるなど許容できるはずもない。

「うう!! わ、私はそんなの嫌だよ。っ…んああっ!？」

「フフフ、心配しなくてもいいよ。ここにいる女の子達は“本人”ではないのだから」

博士はハルカの尻を撫でながら、彼女の取り乱す様子を楽しむ。

彼女らが逃げられない事はすでに“3時間近く”こうして愛し合っている事で証明済み…

彼は余裕で3人と戯れているのみだった。

「…ん…、博士と…、はあ、あ…んっ、エンゲージ…したから…、ポッ♪」

下腹部をさすりながらカガリは頬を染めた。

彼女だけは博士と何かしかの約定のもとにその身をゆだねている。

実際に、ヒガナとハルカを逃がさないための手伝いまでしていたのだ、

二人からすれば、彼女が自分も博士の陵辱対象になっている事が理解できずに困惑させていた。

「はあ、はあ…どっちにしたって、どうやら口でもない事を考えているのは…うっ、ん! …間違いないようだね」

「お褒めの言葉として受け取っておくよ、ヒガナ君。フフ、何度触っても良い揉み心地だ、君は」

比較的良好に発育している胸の肉に手をかけると、

博士は散々楽しんでにも関わらず、飽きもせずに執拗にこねくりまわす。

「う、こんな事をされるんだったら…はあ、はあ…こんなに成長して欲しくなかったかも、ね…、んっ」

本心からそう思っているわけではないが、

ヒガナはこの異常な男と異常な趣味がもたし出す空気感に飲まれまいとして、自分のペースを保とうとしている。

だがすでに犯されて久しい。胎内の精液の感覚はよくわからないものの、あきらかに異物による内から温かさはわかる。

「もったいない事を言うものではないな。ないよりあったほうがお徳というものだ」

ペロリと乳房の下側から上に向けて大きく舐め上げる。

そして乳頭に食いついたかと思うと、彼は頬がすぼむほどにヒガナのオッパイを吸い上げた。

「ふうっ!!? んっ、く…あっ、ふっ!! はあはあっ、あっあっ、う…く…うっ」

「フッフ、美味美味。せっかくだ、出るものが出るようになってから“移す”というのもアリかもしれんな」

ヒガナは熱い吐息を吐かずにはいらなかった。

その両肩は激しく上下し、授乳に適するように限界異常の勃ちを見せる乳首は、出ない事がもどかしそうに震えていた。

「…いい、はあはあ、…ボクも…、吸って欲しい…♪」

「ううう、な、なんなの。こんなのおかしいよ絶対に…あっ!」

カガリが羨ましそうな眼差しをヒガナに向ける一方で、ガクガクと震え出すハルカに博士の興味は移る。

安産型のむしゃぶりつきたくなるようなお尻を掴み、彼のペニスは“再び”彼女のマンコを貫いた。

「ああああっ! い、やあっ、またそんな…あっひ、んうう!!」

ドッチュン!!

先に充填されていたザーメンと愛液が混ざった液体が男根を向かえ、潤滑に過ぎる動きをもって奥まで通す。

「…うらやましい…、博士のチンポ…欲しい…ああ…」

「はあひっ、あうっあんっ、ほ、ほら…っ、あっちでああ言ってるんだから、私より…あ、あっちにつ…い!」

だが博士は無言でハルカを犯す。ただのお遊びやお楽しみではない、本気臭をおわせるコックファック。

子宮口をこじあげ、執拗に短いストロークでピストンを続け、胎内に先だってぶち込んでおいたザーメンをより押し込む。

「はうっ、あうっ、はんっ、あんっ! や、いやあっ、んっんっ、はあひっ、あああっ、いやだっ…よお!!!」

「ふっはあ、うあ…ん…、一体…博士の目的は、んっなん、なんだい? ううっ、何か違和感を感じるよ…っ」

陵辱の手が休まっているわけではないにせよ、ハルカに比べてまだ余裕のあるヒガナは彼の表情を伺う。

質問をぶつけ、瞳を読み、そこから真実を探り出そうとするも、

あまりに彼女の理解の範囲を超えた世界に、ヒガナ自身が彼の意図を解読しきれない。

「目的も何も、君たちが見ているものが目的だよ。何一つ隠してなどいないつもりだがね?」

手馴れた腰使いに、話しながらもハルカに舌を出してよがらせるほどのセックステクニック。

それだけじゃあない、自分やカガリにも陵辱の手は惜しみなく、それでいてまだ余力があるかのような悠然さを感じられる。

——刹那。ヒガナは、ソっとした。居並ぶ彼の“コレクション”の数。それはどうやって手に入れた?

「はひっ、あひっ、いやあっ、こ、れ、いじよっ、う! あんっあんっ、やめ、だめええっ!!!」

「はあ、はあ、…はは、まさか、これ全て…同じように犯して…きた、というのか…い?」

ニマリとする博士の笑みに、ヒガナは冷や汗を流した。

女の子達は動かない。どこか人形めいた風にも見えなくもないが、紛れもなく人体そのものにしか見えない。

その中に自分が並ぶ様子を、彼女はイメージする。この上ない恐怖は、ハルカが取り乱す気持ちに共感するには十分だった。

「クク、君が考えている8割は正解、とっておこう。さあ、どうなるのか…お楽しみだな?」

「あっ、あっ、や…も、ダメっ、いやっ、い…イっちゃう! やだ、やだよおっ、ああああ、や、…だめえええ!!!!」

ドクドクッ! ゴクルルルッ!! グボポッドボココッ!!!

既にたっぷり入っている液体の中、チンポは精を吐く。

尿道がたくわえていた空気が射精に押し出されたのか、胎内で気泡がたって子宮底部に当たって消えた。

ハルカはまるでイってしまうと、あの人形のような彼女達の仲間入りをしてしまうかのように悲鳴をあげ、

そしてガクガクと震えながら、快楽の絶頂と絶望の余韻を並行して感じていた。

「次は…カガリ君にしてあげよう。だいぶお待ちかねのようだからね」

「♪♪ …うれしい、いっぱい…孕ませて…あっ♪」

そしてまた自分もこの後犯される。何度も何度も犯されて、どうしてあんな人形のようなになるのか??

どんなに推測してみても、ヒガナにはまるでその結果にたどり着く過程が見えてこないまま、

二人とともに博士の陵辱を受け続けた。

「フフフ、随分と溜め込んだものだ。優秀な女トレーナーの“複製コレクション”そろそろ使ってみるのも良いな」

それは様々な方法で過去から現在に至るまでの各地の名のある女トレーナー達の遺伝子を受け継ぐ培養複製体だった。

受精から取り出してDNA操作で母側の容姿を完璧にトレースしたもの。

かつての彼女らの形跡をたどり、そこから採取した毛髪や乾ききった血などのサンプルから再製したもの。

——そう、あくまでも“本人”ではない。

「これもマグマ団のバックアップのおかげだよ、カガリ君。約束どおり君には直接子供を産んでもらう、妻としてな」

「…、ポッ♪」

唯一本人が残ったのは彼女のみだった。

マグマ団との契約——博士は潤沢な資金と、カガリを貰い受ける。かわりに優秀な女トレーナーの複製を作り、マグマ団戦力として提供する。

「ハルカ、これでハーレムを作るなんていうのも一興かもしれんな。さあ娘達よ、今日から儂がお前達のパパであり恋人だ!」

彼は狂ったように宣言する。

ネジのイカれた科学者を、ただ一人カガリだけが恍惚とした表情で見守っていた…。



旅をしていれば、当然危険な事もある。他人から恨みを買う事だってある。

それをくぐりぬけたとて、やり次第では後に残る事もあるだろう。

「なんてことだい、まさか…こんなところでしてやられるなんてね…」

今回のヒガナは、その典型的なパターンで窮地に追いやられていた。

自らのポケモンは全て敗北。

多勢に無勢であったにしても、切り抜けて場を脱する事もままならず、敗者の辱めを受ける。

「なんだい、そんなに息を荒げて？ 今まで負けてきた雪辱を晴らせたんだ、嬉しいだろ？」

彼女はあえて挑発的に彼らを煽った。

幾度となく返り討ちにしてきた敵達は、勝者になったはずがその実感を得られず、歯噛みしている。

「キミ達はなんなんだい？ 何をしたいのかな、一体？ 私には理解できないな——ツツ」

思いっきり叩き倒されたのだと気づいたのは、地面の草が眼前にあらわれたのを確認してからだった。

すぐにも身をひねって体勢を整えようとしたヒガナよりも早く、彼らは彼女のか細い手足を押さえつけた。

「うっ…痛いよ。最低だね。乱暴するなんてさ。ツ…ん」

胸を掴まれた——そう感じた途端に、やはり恥ずかしさが込み上げてくる。

こうなることを“狙って”いたはずなのに、いざ実際にされるとなるとやはり現実は想像を超える。

肉が歪んで神経を不自然に圧し、苦痛が生じて彼らの手から逃れたいと乳房がヒガナの全身に訴えかけた。

「はっ、あ…うぐ…。なんてことするのさ。あっ、うはっ…あ、くう…っ」

服の上からでも十分と、彼らの手は競うように胸の脂肪を揉んでくる。

指の形がしっかりと刻まれるように、キツく握られる乳袋は、

粗暴な力を受け流すように指の隙間にオッパイ肉を浮き膨らませた。

「はっ、はっ…んっ、ん。そうか、キミ達は…んっあ…、いやらしい事をしたいと、ずっと考えていたってワケだ」

表情は冷めているものの、どこか嘲笑するかのような言い草は、男たちの神経を逆なでる。

だが、短気を起こすのは簡単でも、それでは彼女に踊らされているだけ。

ヒガナに対して優位であるのは自分達である事を決定付けるためには、身も心も屈服させなければならない。

「ん…何をやる気かな、モンスターボール？ …なっ。あっ、うは…んうううう！！？」

思わず絶句した直後には、喘ぎ声を放たずにはいられない感触が半身を覆った。

彼らを取り出したモンスターボールからは、

ポケモンではなく、ありえない不気味な異物が液体のごとく飛び出してヒガナの腰を一瞬で犯したのだ。

「あぶっ、ひっ…はあああっ！！？ はーはー、な、…なに…コレは……あっ…、はあっ、あうう！」

ヌメヌメと気持ち悪い感触——お尻から股間はもちろん、両方の太ももまで、ヘソから下の敏感なところを多い尽くす。

そんな中、アナルとマンコの穴がほじくられているのだ。外見からではわからない、本人にだけ襲い掛かる異物姦…

「はー、はー、うううん！！ と、とって…ああっ、あ、ひっ！ こ、これを誰かと、とって…っ」

グチュルと気味の悪い粘液のはじける音とともに、下半身を涼やかな風が撫ではじめた。

異物はモンスターボールに戻されたが、わずか数秒でヒガナの下半身はピクンピクンと痙攣するほどに汚されてしまった。

「い、いったい…はあはあ、そ…それは…、はあ、はあ、な、なんな…の…さ…、うう…」

気力も体力も奪われたような錯覚すら覚えるカラダを、男が抱き上げても抵抗はしない。

もとよりその覚悟はあったし、なによりあの異物のせいで力が入らない。

そのまま男の上へ着地させられると同時に、先ほどの異物とは真逆の、硬く熱いモノがヒガナのマンコを貫く！

「んふううう！！ くっ、は、ああ、はあはあ、うっ、んっ、はっ、あぶっ、うんっ、んっ！！」

覚悟していた通りの感覚は、むしろ楽におもえた。

さきほどのアレが異常すぎたのかもしれないし、あるいはアレの作用で犯されても楽に感じる効果があったのかもしれない。

どちらにせよ、膣壁を割って入ってくる男のペニスを彼女はしかと受け止めた。

「はっ、はっ、んっっ、はあっ、あっふ。な、なぜ、はあはあ、最初からこう…しなかったんだい…っ？」

理解に苦しむ、といまだ彼らに対して対抗的な意志が見え隠れる様に、さらなる責め舌を加えんと彼らは動く。

新たな一人が自分の肉棒を彼女の尻穴に突き刺した。

「んっぐうう！！ はっ、はっっ、あんぐっ、はあっ、ふ、ふーっ、んぐっ！ とんでも、ない…変態だね、キミ達は…」

二穴同時挿しにも耐えられる、そんな彼女には相当に責めてみても取り乱す事すらないだろう。

だが、彼らは彼女の反応の差を捉えていた。再びあのモンスターボールを取り出して見せる——

「っ！！ …だから、それは…はあっはあっ、んっんっ、なん…なんだい、あっあっ、…はあっあっ！」

あきらかに全身が波打った。

チンポをぶち込んでいる二人は、己のムスコを通して彼女の穴の変化を感じ取る。

コレが半ばトラウマにすらなりかけているほど、ヒガナには効く手だという事を確信すると、男たち全員がほくそ笑んだ。

「はあ、はあ…ま、またソレを…っ！ あっあっ、っ、使う…と、いうのかい？ キミ達は…、んっ、あっ…ん！」

そう見せかけて、しかし使わない。

ボールをしまおうとすると彼女が安堵の吐息を小さくついたのを見過ごさない。

強烈にチンポをぶちかます。直腸と膣でシーソーのように交互に突いては引いて、ヒガナの媚肉を揺らめかせる。

「はあぶっ、んっ、んっ！ っ、使いたければ使えばいいじゃないか…はあはあっ、私は…そんな、もの…っ、たいしたこと…」

強がりが見える声、瞳から強さが失われ、怯えの色に染まり始めている。

股間の二穴はチンポを追いつくどころか、より深く啜え込もうとすらしていた。他のものを挿れられないように…

「あんっふ！ はあ、はあっ…出す気なんだろう？ あっ、んっ…んっ、いいさ、別にっ、せいせい気持ちよくなってくれば……っ」

ドクッ！ ビュグルッ！！ ドクドクドクンッ！！！！

「…～ツツうく！！ はー、はー…あっ、あっ…ん。おや、もういいのかい？ 随分と満足するのが早——…っあ」

尻穴からペニスが抜け、そして目の前にはモンスターボールを開いて出番を待ちきれずにハミだしているアレが示されていた。

ヒガナの表情から、余裕が完全になくなり、完全に恐怖に満ちた感情が表だって、開いた口から叫び声上がる。

だが、声になる事はなかった。

ソレが穴に取り付いた瞬間、悶絶に大口をあけて声も出せぬままに彼女は白目を剥いてしまったのだから。



「いいねー、相変わらずいいよ、いいよー、ルチアちゃん！」

「ありがとうございますっ、あはっ♪ …はぁはぁ、あんっ」

ルチアの声が聞こえる…男の人は、プロデューサー??
そこまで考えてハルカは思う、なぜかハッキリしないこのフワついた感覚は何?

「新しい子もいいよー。初々しくて締まりはバッチシ、最高じゃないか」

「ふえ? は、はぁ…あ、ありがと…うっ、んっんっ、ごさい…まっ、す…」

あれ、なぜ息苦しいの? こんなに喋りにくいのはなぜ??

沸いてくる疑念もすぐにどうでもよくなって霧散する。
ハルカはあきらかに異常だったが、まるで自覚なく——男達に犯されていた。

「はあんっ、あんっあんっ、もうおじさまったら元気すぎっ、私のアソコ、ガバガバになっちゃうよ☆」

「ははは、ルチアちゃんがあんまりにも可愛くてね、つい張り切ってしまうよ」

言いながらも止まる気配はない。
ドチュドチュと重量感のある突き込みは、ルチアのカラダを押し上げる。

「はぁ、ひい、はぁ…あうっ、はう…うっん! はぁはぁ、んっう」

「ハルカちゃん、だっけ? いやぁ、なかなかがんばるじゃあないか。はじめてだったというのにさ」

「あ、は…ひ。ど、どうも…です?? ううんっ、あっあっ、ふあっ…んん!」

相手の男の言葉を、いまいち理解できない。
ハルカは困惑気味に、しかしチンポをぶち込まれる事には一切疑うことなく股を開いていた。

「あはっあ! んっ、んっ、あんまりいじめてあげないでくださいねっ? 彼女、慣れてないんですから」

フォローに入るその優しさは男達の心を打つ。
別にそんな下心があったわけではない。この程度で点数稼ぎなどこの業界では塵を一粒拾うほど無意味な事だ。

「そのかわり、私にはいっぱいイれちゃってくださいーい☆ あはっんっ♪」

枕営業は星の数。やられるのではない、やらせるという精神で開脚する。
コツを掴み始めてからはどんなに激しいセックスにさらされようとも、愛想を振りまく余裕を持てる。

「ふおおお、ルチアちゃん!! いがった、今ほどこの仕事やっていがった事はなかとっ」

「(うわ…田舎言葉丸出し。この人地方出身? ないわ…)」

だが、彼女とて永遠ではない。業界の闇にその身をしゃぶられつつも、ルチアは将来を考えていた。
たとえファンとて、一般人はよほどの事がないとありえない。
だが普通のスタッフでは収入が心もとない。

同業者や著名人もありかと最初は思った。
だが自身がこういう枕営業を経験しているのだ、異性のアイドルなども業界におけるその立場は弱い。

「(やっぱり、お金もってるスポンサー様よね。多少中年の小太りでも…)」

「うむ、よいね彼女は。実がいい。感謝してるよ…君、彼女を紹介してくれた事をね」

男達の中でひととき重厚なオーラを放つ中年男性。
一見すると醜いデブオヤジとも見えなくもないが、この中でも最大級のスポンサーだ。
ルチアはつい色目でその姿を追ってしまう。だがすぐに自重し、顔を振って表情を元に戻した。

「(焦るな私! 確実にゲットしないと…一生のチャンスなんだもの!)」

新人時代は若さと未来への希望に満ちていて、そんな折に枕営業をさせられた時は当然泣いた。
乙女の抱く幻想を打ち砕かれた先、女としての目覚めと世の中というものを悟った。
だが、時はうつろうもの…

「はぁっ、あっ、あう! あんっあんっ、はぁうっ、あふっ、お、なっ、かぁっ、グチャグチャのジユボジユボでえっ」

ルチアは横目でハルカのほうを見る。
彼女のように次々と現れる新しいライバル。いままではまだ築き上げた人気と美貌でなんとかなってきた。
だがもう限界は近い——そうなればしがみつくよりも、先を見越した犯され方をするほうが賢明だ。

「あんっ、はあん! いらっしゃいませ、おじさまっ。はぁはぁ、今日も来てただけで…んっ、ルチアうれしい♪」

媚びる、が最低限にとどめおく。
他の男達が嫉妬しないように…しかし、本人にだけは伝わるよう、本命へ送る視線を熱く鋭く一瞬だけ突き刺す。

「ははは、君に会うのが楽しみでね。年甲斐もなく若い娘にうつつを抜かすなど、みっともないが…」

「んんっ、とんでもないです。はぁはぁっ、お元気で、すばらしいと思いますっ、はぁあんっ、んっ♪」

本音でいえば早く終わって本命とかわかって欲しいところだが、それはいけぬ。
この場にいる男達は格は様々でも、れっきとした業界の闇を取り仕切る重鎮達なのだ。
誰かを特別視することはできないし、一人でも不満を抱かれるのは問題だった。

「すみませんね、…様っ、すぐに…っ、おわりますんでっ!」

「いやいや、焦らなくても夜は長い。私に気にせずゆっくり楽しんでくれたまえ」

本人が許しても、格上の男を待たせるわけにはいかない。
ハルカを犯している男も同じことを思ったのか、彼らは一気に腰を動かす速度をあげる!

「あふっ、あんっあんっ、あっつはっ、すごおっ、いっ、る、チアの中っ、でっ、あばれっ、て…るっっ♪」

「ひはあんっ、あっひっ、ふあっ、んん! あんっあんっあんっ、ら、めえっ、そんらにかきまわっ、しっい」

「こっちの新人ちゃんもいい塩梅ですから! ぜひ…様も御賞味くださいっ」

ルチアにとっていつもドキリとする瞬間はここだ。
新人に、もし自分以上に具合がいい女の子がいたら——本命を取られてしまうかもしれない。
心がぎゅううっとな締まるのをうけて、彼女のアソコもキツくペニスを絞りを絞る!!

ビュドッ!! ビュドッビュゴゴッ!!! ビュグンッビュビュッ!

「ああああ、ううんっ! はーはー、んっ、す、すごく…たくさん出ましたね、はぁはぁ…はぁはぁ」

焦る気持ちをぐっと堪える。
堪えて堪えて、涙が出そうになるのを必死に笑顔にかえて、相手の男の射精をたたえる。
男を立てぬ女はダメだ——ただでさえ、アイドルは頭が悪い、尻軽、ワガママなどと疑われやすいのだから。

「…いや、そちらの新人は君たちに任せよう。私は彼女に相手してもらおうかな、ちょうど終わったのだろう?」

堪えて堪えて、涙を耐えて、その上でもらった本命からの指名は、極上の幸福感をルチアに与えた。
嬉し涙を流しそうになって、しかし耐える彼女を見透かすように、
男はさりげなくその目尻を指で拭い、彼女を抱いてベッドに押し倒した。

——5年後

「クスッ、わかってます。今日はお泊りでしょう? 私だって昔はそうだったんですから、ちゃんとしてますッ」

だが、わざとらしく拗ねるそぶりを付け加えるのを忘れずに彼の出勤を見送る。
年の差ながら見事にゴールインしたルチアは、業界を知るよき妻として男を支えていた。
夫が今も新人の娘を抱えている事は知っている。

だが嫉妬の炎がメラメラと燃え盛る事はない。抱かれる娘らの立場と気持ちを彼女は理解しているからだ。

「そういえば、ハルカさんがんばってたなあ。目つきが完全に…あれはAV女優コースかな」

テレビ越しでも目を見ればわかる。誰がどんな状況にあるのか。
自分と違ってハルカは完全に性欲漬けにされている事はあきらかだった。
素人目には清純派に見えるであろうし、そうでなくては務まらない。

「ま、がんばってとしか言えないけど。あ、そろそろオッパイが欲しい? はいはいちょっとまってねー」

子供の泣き声がルチアを呼ぶ。きらびやかな闇の中で、小さく光る幸せを掴み取った彼女は今、幸せの絶頂にあった。



「わわっ、ちょ、ちょっとおなにになっ!?!」

バトルに敗北してすぐ後ということもあって、チ力が意気消沈していたところに彼らは襲い掛かってきた。

「うっ、ば、バトルはもう終わったのよ。は、早く次に行きなさい…こらっ、どこをさわってっ」

さすがのエリートトレーナーもこの相手にはお手上げだ。

アヤカの胸元に飛びついた敵…それは無邪気な小悪魔たちだった。

「ど、どーしよ? 叩くわけには、いかないよね?」

「当たり前でしょう、なんとかして振りほどくしかっ。ほらっ、離れなさいッ—あっ、ん!?!」

アヤカがなんとか幼い悪意をその身から剥がそうとした瞬間、

そうはさせまいと仲間が事な連携で、彼女の尻の割れ目に手を突っ込んでいた。

「な、なんてことを…いい加減にしないで! 怒るわよっ!?!」

だが、どんなに凄んで見せても、彼らはキャッキヤとはしゃぐだけで、驚きもしない。

アヤカの頭に血が上る。ただでさえ彼らに敗北した後だというのに、イライラが募る。

「お、お落ち着いて。相手は小さい子達なんだし—はひゃっ!?! あっ、ちょ、そこは…だ、だめえっ」

スカートの短さが仇となって、チ力の股間の割れ目に両手で組まれた4本指のカンチョーが難なく突き刺さった。

グリグリとマンコの赤貝をなじっていると、指先は穴を発見し入り込んでゆく。

「ひんっ!?! そ、それは本当にダメええっ!、あっあっ、や…あっ、いや、やめてったらあっ!!」

それ以上突きあがってこないように、必死でスカートの上から彼らの手をおさえる。

だが、チ力の意識が股間に向いている間に、好奇心の手が胸へと到達するのを許してしまっていた。

「は—は—、も—、股もオツパイもダメ! はなれてっ、やっん!!」

あっちを防げばこちら、こちらを防げばあちら。

堂々巡りを続けているうちに、チ力の衣服は乱れて覆い隠されていた部分も徐々にあらわになってゆく。

彼らは悪戯者の笑いをこぼしながら、周到に状況が進行しているのを確認しながら動いていた。

さながらゲームを攻略するかのように…

「ぐぐ、勝負に負けただけじゃなく、こんな子達に翻弄されるだなんて!」

アヤカがついにキレた。

エリートトレーナーたるプライドもズタズタで、精神的に追い込まれた彼女は相手が誰かなど関係なくなっていた。

自分のカラダを管め回すように撫で回し、あるいは管め回す悪ガキ達の頭を篤づかみにして、乱暴にひっぺがしてゆく。

「ほらほらほらっ、さっさと離れなさいっての! しつこいと、もっと酷い目にあうわよっ!?!」

彼女の手は次々と彼らを引き剥がしていった。チカもこれで終わってくれる、度の過ぎた悪戯だったと安堵の息をついた。

だが——

スッパウ! スプブ…ズンッ!!

「んぐう!!? な…なっ、…あ!?!」

驚きの声と共に、アヤカの動きが静止する。

引っぱがされた彼らは、ただで引き下がるはずがなかった。

完全な死角だった後ろから襲い掛かり、彼女のマンコの中へと己のペニスを突き立てる奇襲を行ったのだ。

「っっ、いくらなんでもやりすぎよ! はあはあ、あっ、きやあああ!?!」

呼吸を整え、キツく叱りつけようとしたその時、

止まったアヤカに波のように押し寄せた彼らによって、彼女はあえなくその場に倒されてしまう。

もうこうなったら体勢を整えなおす事もままならないだろう。

「ふわわわ! そ、それはマズインじゃないかなあ、ね、やめといたほうがいいよ? 取り返しのつかない事に——」

チカは柔らかい言葉でなんとか説得しようとしていた。

だが、ペニスは必死に彼女の膣内を掘り進んでいる。

僅かに退いては基本位置をより奥へ。その繰返しで、すでに膣の奥壁は我慢汁をこれでもかと擦り付けられていた。

「あうっ、はうっ、あん! …はあはあはあっ、まずい、まずいよお。これって絶対中に出されちゃうじゃない」

行為そのものにのめりこんで必死に腰を叩きつけてくる姿は可愛いものだ。

しかし、それだけ必死だということは、引き抜いて外に出す、なんて事は考えていないと見ていい。

子宮がキュンキュンさせられてしまう——チカは激しい快楽の誘惑にかられつつも、なんとか拒絶する心を振り絞る。

「ね、やめよ? あとですっごく怒られるよ? だ、だから…んっうっ、、ね? はあはあ、こ、これ以上はやっちゃ…」

だが、そう言うとならば、お姉ちゃんすっごく気持ち良さそうにしてるのに? と返してくるのだ。

その表情から、行為とそれによって生じる快感について理解しているのがわかる。

あくどくもわざとらしい問い返しに、彼女は肩をひそめながら口ごもるしかない。

「はあっ、ふっ…うう!! と、とにかくそれ以上はダメ! はあはあ、あと、オツパイも吸っちゃ…だめえっ」

攻めの激しさは、気を抜くと落ちてしまいそうなほど気持ちよかった。

バトルで敗北した事すら忘れてしまいそうなほど、この快楽に溺れてしまいたかった。

「うううっ、こんな、こんな…相手にっ、はあはあっ、負けた…なんっ、て!!!」

アヤカは悔しそうになっているものの、表情は今にも緩みそうなほど、憤りとトロけ顔の間でさまよっている。

時間がゆっくり流れるような、急激に進むような…

ペニスが単調に前後すると、膨らんで射精がまもなく行われるのが感じられ、モヤモヤしたものが頭の中を満たす。

「はあはあっ、…ああ、や、やっぱり、中に…中にくるっ…はあはあ、も—、どうなっても…、知らないからねっ!!!」

ビュルッ! ビュグクンッ!!! ビュグビュグ!!

ああ、出しちゃったよこの子達はほんとにも—。

不思議と落ち着いた気持ちが沸き起こる。しかし心持ちは裏腹に、チカの表情は戸惑いに満ちていた。

隣ではアヤカが必死に抗っている。

自分の中で生まれつつある感覚を否定して、あくまで彼らを許さないつもりなのだろう。

今日は散々だ——真っ青な空を、ドロドロとした白濁色の雲が覆い隠し、ザーメンの雨となって原っぱに寝転がる自分に降り注ぐ。

脳内イメージがすべてザーメンに埋め尽くされた時、チカはもうどうでもいいや、と小さな悪魔達にその身をゆだねてしまった。



「ふあっあっ、やめてよ、アタシはそんなの入らないって言ってるのにー」

「うるせえ、ならカづくよ。ウシオおっ！」

アオギリは暴れるフヨウを強引に押さえつけた。

「あにィ、こっちの赤いのはどーする？」

「はなせっ、誰が手をかすもんか！ …うっ、そんなとこさわらないで、いや、さわんなっ！」

アスナも懸命に抗っているものの、大柄で筋骨隆々としたウシオ相手ではどうにもならない。

「へへ、アクア団の野望もあと少しよ。いまのうちにオメエも素直にウンと言っといたほうがいいぜ？」

「そんな事、言うはずない…言うもんかっ！！ はなして、はなせっ！」

最終局面へ向けて、確実に実力ある者を仲間引き込む。

だが相手が実力者であるほどになかなか実現しない難事だ。

もとよりアオギリにしるウシオにしる、スカウトに向けた性格の人間ではない。

「こら、暴れるなって。うおっと、イデテ、オレっちの力を舐めん——」

「ウシオ、交換だ。オマエじゃそいつの扱いは無理だ、こっちのお嬢さんのほうをやれや」

「へい、あにィ！」

力ではウシオの方が上手だ。

しかしただ力のみでどうにかしようとしても、アスナのようなタイプは決して折れない。

アオギリは早々に見切ると、尻を撫で回していたフヨウを片手で投げ飛ばすようにウシオに渡す。

「はうっ、今度はなに…あっ、乱暴はやめてよお」

だがその言葉ほどフヨウはおびえている様子はない。むしろお気楽さがいまだ残っている。

ウシオがその豪腕で過分に込めた力でその肌を触り揉んでも、彼女の中で危機感が高まる事はなかった。

「へ、へん！ 誰が相手だってアタシは…あんっ！？ へ、へんな声でちゃった…じゃなくて、あっあっ!？」

「へへ、思ったとおりだ。アンタ強がっちゃあいるが…」

「な、何をいって…へ、別に強がってなんてっ、んっ、はぁう！」

アオギリの愛撫の手と指摘は、アスナを拳動不審に追い込んだ。

上下に携える4つの柔らかい肉の丘を順番に一揉みしていく、たったそれだけでアスナは全身を小鹿のように振る寄せた。

「っ、っ、あう…あっあっ、い、いや…そ、そんなの…だめ…あっあっ」

「へっへ、ちよろいちよろい。おうウシオお！ そっちはどうだ？」

「へい、あにィ！ ぱっちりやってまさあ！！」

見るとウシオは既にフヨウに自分のイチモツをねじ込んでいた。

アイツにそんな早く本番に移行するほどのテクがあったか？ と一瞬疑問に思ったが、

フヨウの様子からそのカラクリが判明した。

「うっうっ、痛い…痛いよお…うっ、ぐっ…あ、ひっ、ぐすっ…ああっ」

「おいおい、無茶して壊すんじゃないぞ？ 大事な戦力になってもらうんだからな？」

もっとも泣かすくらいまでやるつもりではあったから、アオギリもそれ以上強くは警告しない。

実際、フヨウのような明るく屈託のないタイプは、力でウシオのようにねじ伏せるほうが手っ取り早い。

「はううっ、うぐっ！ お腹がっ、中が…あっあっ、んっ、ひぐうっ！」

ウシオのムスコはその体格に負けず劣らず立派だ。

あんなモノでかき回された日には、もう他の男のイチモツなどいずれも短小に感じられるほど穴は拡張されてしまうだろう。

「あにィ！ こいつなかなかいい穴もってやすぜ！」

「後でまわすのわかってるな？ ガバガバにしちまうんじゃないぞ——さて」

すっかり恐怖に染まっているであろう表情を、アオギリは彼女を見ずして確信している。

ハッキリとわかる、アスナはネンネだ。

あのウシオのやり様を目の当たりにして、セックスに対する恐怖心が芽生えないはずがない。

「あ、あっ、やめて…やめる。そ、そんなのアタシは…っ、あっ、い、いや——あっ！」

「おっ、う〜。なにがイヤだってえ？ わりいなあ、聞こえてなかった、へへへ」

ズッポリとハマった肉棒、ピキピキと強張る膣壁。

愛液が急いで苦痛を和らげようと流れ出るが、

悪いイメージを持ったまま挿入されたアスナは、苦悶を浮かべて瞳を泳がせていた。

「そおら、どうだジムリーダーさんよお。オレのチンポの味は？」

「ひぐっ、う！ お腹を…えぐっ、うっ…って、はーはー、な、なんなの…なんだよ、これっ…へえっ！！」

ズッコバッコとリズムカルに動く男の股間と女の尻。

一見スムーズに見えるその動きではあるが、苦痛に悶える女の方にはまるで余裕がない。

「あくうっ、はっ、はっ、んんう！！ い、いや…たすけっ、てっ…おじいちゃ…っ、あっあ！」

「ククク、素直にオレらの仲間になりやあ、こんな苦しい思いをせず、楽しく気持ちよくなれたものを。そうらっ！」

「ひいいいっ、えぐりこんでくるにやあっあぁ！！ こわれるっ、こわれちゃうからあぁっ！！」

ブルンとふるえた胸は男のカラダに着地して落ち着き、広がった膣口に電気信号が集中して感覚が増す。

「そうら行くぜえ！？ デキちまったら強制的にアクア団に入るんだ、いまのうちに折れちまっとけ！」

「そんなのいやあぁ！ 助けておじいちゃあぁあんツツツ！！！！」

ドクドクドクドクドクドクッ！！

グビュルウウッ！！ ドクッ！ ビュドビュグビュブビュウッ！！！！

シタバタするアスナのカラダをがっしりと挿んだ種付けホルード。

風呂上りのピールをかつくらうかのような表情で、アオギリは自分のザーメンをアスナに飲ませた。

「あーあ、さすがに5回もまわしゃどっちもガバガバだな。ったく無駄にデケエモンぶらさげってから」

「すまねえ、あにィ…。つい張りきっちまいやして」

アスナもフヨウも、もはやウンともスンとも言わない。

ズコバコとチンポを出し入れさせ放題で、自分のカラダの主導権すら放棄したかのようグッタリして呆けていた。

「でもこんだけやれば大丈夫ッスよね？」

「いや、徹底的にやり込むんだ。今はこうでも回復すりやまた抵抗すっからな、アジトに連れていってヶ月は…ん？」

アオギリは思わず自分の目をこする。

フヨウの瞳の色がかわったかと思うと、その周囲に何か半透明のものが見えたのだ。

「？ あにィ、どうしやした?? ……………ッ!？」

ガタイに似合わぬ恐怖にひきつった顔で、ソレに気づいたウシオも硬直した。

その直後——

ビュルルルルルル！ ビュグッビュグッ！！ ビュドビュグルルルルルルッ！！！！

ブシュウウッ！ ブチュッ！！ ビュチュルルルルルルルッポッポッポゴゴッ！！！！

ほとんど垂れ流しに近い状態で、アスナとフヨウの中に入りっただけの射精が行われた。

だが、その種の主達は白目をむいて上半身だけ直立不動のまま静止して微動だにしない。

ビュグッビュブッ！ ドビュルルルルルルルッ！ ビュグウッビュブウッ！！

壊れた水道のように、二人の射精は止まらない。

やがてその身はやつれ、ほそまっていき、かわりにアスナとフヨウの腹が膨れ上がっていった。

『オオオオ、アラタナ、イノチ…ウマレカワル』

『オレモ』

『オレモオオ』

彼らの口へ得体の知れない光がドンドン入っていき、“彼ら”は精子となって子宮へとなだれ込んでいっているようだった…。



「くっ、なんて数だい、これじゃキリがないよっ」

イラだつように吐き捨てたイズミの台詞は、男のペニスにあたる。屈辱的に見下される配置に、彼女は奥歯を噛み締めた。

「……………う…このエンゲイジは…いや…、ツツ、んっ」

カガリは珍しくハッキリと拒絶を示す。腰を退こうとすると、男に強引に引っ張られて一方的な合体を強いられた。

「…あ、うっ…、ん…。……………はあ、はあ……あ、あ」

異なる組織の二人であるが、今この時は同じ獲物として男達にそのカラダを貪られていた。

「適当に食って、隙つくってやろうとしたけど、こんな人数じゃ…ぐぐっぶ、うごっ!!」

少しでもしゃべっている暇があったら相手しろとばかりに新手がやってきて、イズミは口に肉棒をねじこまれる。こなす事はできるが、それは自分のペースを保てればの話だ。こうも一方的に中断なくやられまくりでは…

「ぶぐむっ、もごが、ごもももおもっ! ぶぐっ、うぐっぶぶぶぶぶぶっ!!」

パイオツすげー、もっと揺らそうぜ、ヒヤハハハハ——男達が口々に叫ぶ声も耳障りだ。低俗に過ぎる言動はあまりにも不快で、しかし口は塞がれても耳は塞げない。悪い意味で匂いたつペニスのイカ臭さに加えて、アソコをズチュズチュと突き上げてくる衝撃だ。

「(ちくしょう、アクア団のイズミ様ともあるうものが、こんなくだらない連中なんぞにいい!!)」

揺れる自分の胸が、こんなところで弄られるために育ったわけじゃないと、主張しているようにすら見えてくる。意中の相手ならば存分に振るう自信のある自分のカラダが…。彼女の中で延々とループし、憤りが強まってゆく。

「…あ、あ…う…く、うん…、はあはあ、キミたち…とは、んっ……………したく、ない……のに…」

カガリがいくらそうは言っても、当然彼らはやめない。うすら笑いを浮かべながら、その滑らかな曲面を持ったでん部を撫で回し、マンコにペニスを突き立てるだけ。

ズッチュツ、ズッチュツ!!

「…あっ、は…、んっ…あっ……」

声は小さく多弁でない彼女だが、その喘ぎ声は穴を出入りするペニスが奏でる淫音と絶妙に協調している。それがさらに彼らの性欲をあおりたて、やがて待っているのも我慢できない者があらわれだす。

「…は…っ、ん…そこは…、あ…ダメ…、インサートは…あっ、あっ、あっ! …～～ツツ!!」

ピクンと奮える上半身。下半身は逆に固定して微動だにしない。だがやがてビリビリと小刻みな振動が起り、ペニスを吐き出そうとする直腸と膣の収縮が発生する。彼女のお尻が目に見えて大きな波にさらされたように動くと、男達はそれぞれの穴にさらに深くペニスを押し込んだ。

「…あっ、は…、あ…ぐ…う。……………はっ、はっ…う、あ…あ?」

二本挿しで穴の奥をグリグリえぐられる感触など、当然感じたこともないだろう。カガリは自分の中で、その感触に対する適切な感想を見出せずに困ってしまう。

「はあ、はあ…、あうっ…、んっ、う…こんな…の…、感じたこと…、な、い…、…あっ、は…あ」

辛いのか愉快なのか、苦しいのか気持ちいいのか? 相反する二極の言葉が次々と葛藤しては流れて、やがて言葉の引き出しはカラになる。そこにペニスに突かれる衝撃と、狭い穴を割き拡張される内側への圧迫感が純粋に流れ込んできて、空白を埋めていった。

「ぐはっ、ごほっ、げほ!! いい加減にしなっ、私はお前らなんか抱かれるつもりは今もないんだよ!!」

吐き捨てるようにペニスを口から追い出すと、そのまま言葉をぶつける。腹の中でぐるぐる回っていた怒りをすべて吐き出すように、イズミは男達を一喝した。だが、彼らはニヤニヤと笑うだけ。イズミのアソコを貫き、その熟れた肉体を好き放題にしている時点で、彼らが恐れるものはない。

「あぐっ!! やめなっ、くっう…あとで…っ、はあはあ、ひどいよお前達っ!!!」

報復の意欲をむき出しにする彼女だが、現実として圧倒的に優位にある男達に、恫喝も脅迫もただ滑稽なだけで、彼らの支配欲をより彩ってくれるに過ぎない。

「あっはっ、ふっ、うぐっ!! ちくしょう、ちくしょうっ…こんなぐちゃぐちゃにしてっ、なんなのっ!!」

気の強い女を屈服させる——彼女が吠えれば吠えるほどに、彼らはさらに満たされ、上乘せる性欲に還元される。イズミの気性や性格は、事この場の状況においては最適にして最悪の相性といえた。

「…う…は…う、…あっ、あっ、んん…、わか、らない…、…エンゲイジは、嫌…な、はず……でも…これは…ナニ?」

お尻をたぶたぶん揺らしながら、カガリは自分でも気づかぬうちに腰を振っていた。男達はとっくに気づいてほくそ笑んでいるが、彼女は己の中でめまぐるしく変化する性への感覚に困惑しはなしで、いまだに自らペニスを求めて動いてしまっている事を自覚していなかった。

「はあ、はあ……んっ…、う…、ん…、おかし、い? …はあ、はあ…、なんだか…、ワルく…ない…??」

ナニがなんだかわからない。頭の中が真っ白になると、嗜好も主義も望みすらも意味をなさなくなる。葛藤の果てに頭の中がグチャグチャになって、一度リセットされて出来たスペースは、最も大きなインパクトを持つ性的肉欲や快楽が、一瞬にして占拠し、カガリの中で勢力を拡大していく。それが彼女に困惑を招いていた。やがて肉欲が意識に勝れば、何も考えることなく彼女も男を望むだけになってゆくだろう。

「ふーっ、ふーっ! うぐっ、どんな事されたって、私はっ、このイズミさまは簡単に墮とせやしないよっ!!!!」

ビュビルッ! ビュグンッ!! スビュッドビュチュッ!!!

しっかりと意識を保ち、嫌悪感から拒絶をハッキリと抱いて彼らをにらみ続けていれば、何度射精をくらおうとも問題ない。だが、そうしてあくまで逆らうイズミは、ただ男達に対してますますやり甲斐ある獲物だとアピールしているに等しい。カガリのように素直に肉欲に傾きはじめてたほうが、陵辱に苦しまず、彼らの興味もその射精の満足と共に縮小していく。長い目でみれば、イズミはド壺にはまりつつあった。その身はより犯され、男を刻まれる回数を増やす。それで耐え切れればよいが、犯された数が増えるほど、その意志が崩れた時、大きく強く墮ちていってしまう危険に彼女は向かっていた…



「うあっ、うあっ…あっあっあっ！ あっっ、あっっ」

指を立て、刻むようにひっかきまわす手にもビクともせず、男は腰を叩き込む。
無残に破かれたスパッツの股間部分を、少女の肌の色艶に比べてあきらかに黒ずんだモノが出入りしていた。

「はあっ、あっ、うう！ も、もう…やめて…え…、うっ、うっ」

だが男は無言でひたすらに腰をたたきつけるばかり。
お尻を掴み、自分の股間に座らせて対面座位になると、いっそう激しくその身を揺さぶった。

「やあああ、も、もういやっ！！ はあはあ、こ、これ以上出さないで、お願いッ…あっああ！」

チュブクツ！ チュルルルッ、ドチュッドチュウウッ！！

「あ、あああ…ああ…、ま、また熱いの…が、…き、きてる…ううう…」

射精中、お尻の肉を左右ともにつかまれしっかりと抱かれている。
ザーメンは膣の最奥から流れ出ない——受精への恐怖が増大し、ハルカの瞳に涙の膜が張られた。

「あーあ、また中に出してるのかよ。たまにはこっちにもやらせろっての」

「ぐふふ、この娘さんのマンコがコイツとの相性抜群なのだ、仕方ない」

男達はハルカを犯す事をさも当然のように会話している。
犯されはじめてからいったいどれくらいの時間がたったのだろうか？
アソコはすっかり男根の大きさと形に広がったまま、閉じようとしなない。

「はー、はー、はー、はー…、も、もう…いい加減にしてよお…はあ、はあ…うう、ぐすっ…」

「まあそういいいなさんな。お前さんのカラダは抱き心地がよくてなあ。なかなか飽きもせんのだよ」

身勝手きわまりない言い分にも、彼女にはもはや怒る気力もなかった。
やり終えてもクリトリスや胸をまさぐり続けられ、次もやる気満々のまったりした時間でも
ハルカの性感帯は休息を与えられない。

「次はいい加減、俺にマンコぶちこませろよ？」

「わーったわーった、んならコッチを試させてもらおうかなって」

そういって、男はようやくチンポを抜いたかと思うと、ハルカのお尻の穴を指でほじくりだす。

「つつ！！ あっ、あっ、ひ！？ そ、そこって、あっあっ、ううう！！」

「ちゃんと洗ってるか？ クソまみれになったりしたら、あとでしゃぶって綺麗にしてもらおうぞお？」

アナルの入り口付近で指を90度曲げ、左右にぐりんぐりんねじ回す男。
曲げた間接から指先までは3、4cmはあろう長さでそんな事をされたら、狭い直腸は強烈に押し上げられる。

「んあっ、あっ！！ そ、そんな…あっ、やめ、いやっ、あうあ！！ やめ、へええっ！！」

マンコと違い、どんなに弄ばれても愛液が分泌されるわけでもない。
いわば潤滑油となるものが何もない穴だ。しかもソレを目的とする女性器に比べ、はるかに狭く伸縮性も弱い。
そんなところにチンポをぶち込まれたら…どんな酷い事になるか、想像するだけでも恐ろしかった。

「ほら、こっちのつけるよ。傾けりゃ横からケツいれられるだろ？ こっちは本命ぶちこむんだ、少しは自重しろよ」

若いほうの男がハルカのマンコに自分のイチモツを挿入する。
同時に舌打ちが飛んだ。さんざんやりまくられた彼女のアソコは、締めりがもう一歩不足していたのだ。

「やれやれ。ま、無茶な体勢もそれはそれで利点があるんだ、そらっ、どうだ！？」

「んふああああ！！？ ほ、ホント…にっ、お尻にも…そ、そんな挿入れるだなん、って！！」

緩んだマンコが一気に締まる。
別の箇所でも強烈な刺激を受けたカラダは、全身の筋肉を強張らせ、結果として膣壁も強く狭まってきたのだ。
他の男のおかげで締めりがよくなっただなんて、男としての自尊心が傷つく話だが、この際は仕方ない。

「ただ締まるだけじゃあな。おらっ、もっとがんばらねーとケツがぶっ壊れちまうぞ？」

イラだちをハルカに向ける若い男は、マンコを乱暴にかきまわす。
膣壁を通して、直腸内で蠢くもう1本のチンポの動きまで伝わってくるのは、気色悪いことだが文句ばかりも言ってもらえない。

「ああんっ、あっ、ひぎいい！！ やめ、てへえっ、あっ、あっ、ううっ、お、な、がっ、ぐ、ぐちゃぐちゃになるう！！」

彼らにしてみれば彼女の肉体を気遣う必要性はなく、乱暴にし放題だ。
彼氏彼女の関係でもなければ、恋する相手でもない…完全な行き当たりばったりに犯しているだけの女なのだから。

「うううっ、こんな…ひ、どいつ、はあはあ！ あんっ、あうっ、はあっ、ううっ！！」

「はっはっは、しっかり喘いでるじゃあないか？ 難しく考えなさんな、楽しめばいいんだよ楽しめばッ！」

こんな事をしておいて、どうしてこうもお気楽に犯してられるのか？
年の功？ いやいや、やってる事は紛れもない犯罪行為だ。若い方の男のように余裕なくイラ立つ方が自然だろう。

「うっ、うっ、あう！ はあはあ、す、好きで喘いでいるわけじゃあ…ッ」

「おら！ 無駄口たたいてんじゃねーよ。マンコしまり悪くなってんぞ！？」

そんな事をいわれても、ハルカに意識してアソコを締めるいわれなどない。
当然そんな声は無視する。が…

「んうう！ あっ、ふあああ！！？ ひぎっ、いっ、やっ、あっ！！」

まるでそれを見透かすかのように、アナルの方のチンポが強く深く挿してくる。
すると自然とマンコの方も締まらせてしまうのだった。

「はあああ！ や、いやあ…っ、も、もうっ、こんなのやだあああっ！！ うううっ、やめて、もうやめてえええええ！！！！」

ドゥビュッ！ ドッチュウウ！！！！ ドュブチュクブクルルッ！！

「うおうっ！ こっちも…いくぞっ、腹ン中まで染み渡らせてやるぞおっ！？」

グビルルルルウルル！ ゴルルルッ！！ グビュリユルルルルルルルルルル！！！！

嫌なグル音とともに大腸を駆け抜けるザーメン。
一瞬にして腹を取り囲むように温かくなり、その囲いの中がじわじわと体温が上昇してゆく。
ドロドロしたものが腹中をうごめき、吐き気を催す気持ち悪さが彼女の胸の奥深くやや下に沸き起こった。

「うぶ…はあ、はあはあ…」

戦績はめっきり悪くなった。
試合中、気持ち悪くてまともに立っているだけで精一杯だし、ポケモンへの指示も精彩を欠く。
だが、彼らは試合の前に必ず襲い掛かってきて、たっぷりとハルカの中へとザーメンをぶち込んでゆくのだ。
突発的な試合を除けば、彼女の勝ち星は0。もはやポケモンマスターとしては致命的ともいえる哀れな成績だった。

「うぶっ！！？ う…う…、こ、これ…ってえ？？」

強烈な吐き気を感じる。だが吐き散らすわけにはいかない。
そういえば最近、胸も膨らんできた気がする——そこまで思っ、彼女はドキリとした。
無意識のうちに、自分の下腹部に手を置く。膨らんではいない…だが、かすかに自分の脈拍とは違う鼓動を感じた気がした…



「いまどきのスクールでは、どんな風に教えているのかしら？」

懐かしいトレーナーズスクールの雰囲気、彼女はつい心躍る。ツツジは、自分もこのくらい未熟な頃があったと感慨深く過去を振り返るが、後輩達にとって、先輩ゾラする彼女の態度はあまり面白いものではなかった。

「あら、わたくしに教えてくださるの？ ふふっ、よろしいですわ、わたくしは手ごわいですわよっ♪」

気分よく彼らの挑戦を受ける彼女に、後輩達は顔を見合わせてうなずきあった。

「おやめなさいなっ！ ぼ、ポケモン勝負をするのではなかったの!？」

驚きを隠せないが、悪いおふざけでしたので済ますようには見えない。彼らの手つきには力が籠り、自分のスカートはおろか、胸を掴む手でさえ度をこしている。

「あうっ！ な、なんて事をなさるの！ このようなこと、許されませんわよ!？」

スクールという場所柄、人を呼ぶのに難はない。だがそうした脅しにも彼らは怯まず、ツツジへの陵辱の手を引くことはなかった。

「これがいまどきの…って、そんなはずあるわけがないでしょう！ あっあっ、そ、そこはいけませんっ！」

タイトの上から股間の形をこすりだそうと、指が押し込まれてくる。だがそちらに構っていると、胸元を引き裂こうとしている者への対処がおろそかになってしまう。結局どちらへの対応も中途半端になってしまい、布がピリリッと乱暴に破かれて肌色があらわになり、下はタイトが伝線して、赤色一色の脚の中で肌色の水溜りがいくつも広がるのだった。

「あっっ、こ、このように破けて…ひどいです、絶対に許しませんわよ!!!？」

だが怒っている暇などない。そうこうしているうちに、彼らの指は破けた衣服の隙間から侵入して、ツツジの柔肌を生でなぞる。

「ああんっ！ そ、そのようなところにっ…触るだなんっ…あ、あっ、はあはあ、んううっ!!」

他者に肌を直に触られるなど、性別に関係なく早々あることではない。ましてやこの特異な状況と流れでは、彼らの触れる意図はいやらしい意味以外にありえない。やる側もやられる側も自然と意識がエロスにかたむき、カラダはその準備を行ってしまう。

「はっ!？ い、いけません今そこを触るのはっ、んっ、あっ、…あんっ!!」

アソコが濡れている——自然にそうなるとはいえ、それを知られては羞恥に顔を染めずにはいられない。彼らが笑う。知られたという事実がますますツツジを辱め、その身の血流を早めてゆく。

「う、う、う…せ、生理現象ですわっ！ 別に感じてなんているはずがありませんっ…な、なんですかその顔はっ」

後輩がニヤニヤと笑い自分を見下すその顔はなんとも不気味で、ツツジは不快感を抱く。そして、その表情を見たくなくて視線を少し下にさげると、視界に入ったのは——

「!?!? な、な…そ、そのようなモノ、なぜ出しているの?! ま、まさか…わたくしにっ!?!？」

そのまさかだ。はじめてみる異性の生々しい肉の棒は股間へと近寄ってくる。思わず後ずさりした彼女だったが、何かにつまずいて尻餅をついた。

「っ! …な、なんですかこんなところに何が…。あっあっ!! 嘘ッ…あっ、——〜〜〜ツツ!!!」

それは別の男子だった。後ろから羽交い絞めにしようとして迫っていた彼にぶつかって、上に乗っかるように二人ともども倒れたのだが、倒された彼はその状況を臨機応変に利用し、ツツジのアナルに自分のモノをぶち込む事に成功する。だが彼女には苦痛に悶えている暇はなかった。マンコにもチンポの魔の手が突きつけられていたのだから。

「い、いや…そんな、む、無理です。わたくしにそのような事を…あっあっ、ん〜〜〜ツツ!!」

直腸が大きくあけられて、膣の底床が背中から押し上げられている中、マンコを割って入ってきたチンポによって膣壁は押し込まれてゆく。アナルをペニスが突けば、マンコに入っているペニスが押し上げられて、膣の天井を擦り、Gスポットを強く刺激する。

「んうっ!! はっ、ううっ、そ、そん、なっ、はああっ!？」

本人には、基本下半身の肉を圧っされて苦しい中で、快楽が生まれるという奇妙な感覚を味わわされる。だが、次はマンコをペニスが突く。

すると今度は直腸の天井が押し下げられて狭まり、強く肉棒を刺激するのだ。

「はぐううう!!! あっ、はっ、い、痛いですわ、や、やめ——、ツツあはん!!!!」

もとより狭い穴、そこで肥大化するチンポ。そしてそれがまた動く、強烈な摩擦が生じて今度は舌痛を生み出す。苦しい中で垣間見る、一瞬の天国と一瞬の地獄の往復。それは彼女の感覚を疲れさせ、何が気持ちよくて悪いのかも乱れはじめる。

「はあ、はあっ、なん…て、事なのっ、い、いまどきのスクールがこ、こんな…事になっているだなん、てっえ」

実際、時間をかさねてゆくごとに生徒の質はあまりよろしくなくなってゆく問題を抱えている。進んだ技術や便利な道具に彩られた世の中で学ぶほどに、意欲や意識、モラルは低下し、多少の不満を覚えただけで、忍耐もなくすぐにこのようなマネに走る性根の甘さ…

「あっ、あああっ、わ、わたくしにそれ以上…あっあっ、いけません、おやめなさい、ああっ、いけませんわあっ!!!」

ビュルルルルルッ!!

ドビュッ!! ビュグッビュッ! ビュビュルッ!!!

射精にも躊躇いがなく、問題意識も希薄…行動がどのような結果をもたらすのかすら、まるで考えないその場限りの気分的な行動…ツツジは思った、これは由々しき問題だ、と———

「ふう…わたくし、身を呈した甲斐がありましたわね」

その日、彼女は中絶処置を受け、病院からの帰路についていた。テレビでは、トレーナーズスクールの生徒による暴漢事件が大々的に報道され、犯行を行った男子達は厳しい処罰を、スクールにもその監督体制に改善を促される指導が行われた。

「身を切る思いでしたが…わたくしとしても、大切な母校がこれ以上悪くなってゆくのを見過ごせませんもの」

ツツジは、散々に犯された後、自分のマンコの中はあえて洗わないでおいた。妊娠することで、絶対的な暴行された確証を持つためだ。洗って事後避妊もバッチリ行ってしまうと、あるいは彼らに言い逃れで犯行をうやむやにする隙を与えてしまう。まだ早期だったこともあり、中絶は簡単に負担もない。

「…なにより、いくらわたくしでも、さすがにまだ子供を持つ事はできませんもの」

彼女は天を仰ぎ見て祈った。中絶し終えたとはいえ利用してしまった命に謝り、その冥福を祈る。好きな人と結ばれた際には、どうか自分のお腹に生まれ変わってきてくださいね、と…。



「あくぐ…こんな簡単にやられるなんて…っ」

シノブは悔しそうに齒噛みする。

しかもバトルの巻き添えをくって痺れて動けず、みっともない姿を晒していた。

「へへへ、この程度でジムリーダー目指してるだなんて、笑っちゃうな」

「ま、まだ僕の方が、つ、つ…強いんだっ」

対戦相手はいずれも余裕で勝利の余韻に浸っている。

その様子がますます悔しさを倍増させるが、

勝敗が決した以上、彼女は何をいわれようともただ身を震わすしかない。

「お、おい…あれ。……」

「……………よ、よく見ると…か、か…可愛いんだな？ ……………」

「な、なに？ こっちはまだ痺れて動けないって、何黙ってこっち見て…え、え？ ちょ、ちょっと??」

痺れで痙攣気味にふるわせたカラダは、彼らに十分なセックスアピールとなってドス黒い感情を呼び覚ませた。

肉付きはほどほどながら、鍛えているであろうカラダは、健康的な魅力にあふれている。

太ももやふくらはぎの曲線、ぎゅっとしぼったようなくびれなど、異性の性欲をそそるライン美を魅せていた。

「や、やめて…近寄らないで！ わ、私のカラダはトウキさまだけの——はひゃうっ!!!」

明らかに触れようとする男達に対して、

動けぬカラダを必死にうごめかせながら遠のこうとする彼女に、再び強い電流がほとぼしる。

完全に身動きできないまで痺れさせられ、シノブの表情は一気に恐怖に染まった。

「あ、や…あ…あ、う…あ、う…ツ、ツウ——ツツ」

「ははは、な、なに言ってるかわかんないんだな！」

「へっへ、ピクンピクンしちゃってるぜコイツ」

衣服をめくりあげようが、太ももに頬をつけてさすりさすりしようがなんら抵抗はない。

それどころか触れるだけでもピクンと大きく揺れる。

感電によって彼女の神経は過敏になり、走る電気信号は乱れて大きくも小さくもなって伝えられてくる。

「っ、う、っ、う！ あ…っ、んあ、っ、あっ!!!」

口もうまくまわらない。懸命に拒絶を叫びたいのに、まともな言葉ひとつ吐き散らせなかった。

首を横にぶって意志を示そうにも、それすらできないほどカラダが自由に動いてくれない。

今のシノブには、彼らに明確な意思を示す方法がなかった。

「思ったとおりなんだな、締め具合よさそうなんだなあ〜」

「おいコラデブ、順番は守れよ。手えつけてんじゃねえよ」

ぶにぶにとマンコ肉が描くω（オメガ）型のラインを指で押し、アソコの様子を確かめる男。

胸を寄せてはあげて、ふくよかとはいづらい胸板に楽しみを見出す男。

カラダのあちこちをつつについては、反応の違いを見て楽しむ男など、彼女を使って思い思いに楽しんでいる。

「あ…あ、う…い、か…んっ、にっ！ …は、っ、は——は—、…し、…お……お」

「お？ そろそろ痺れがおさまってきたか？」

「は、はやくするんだな！ 僕の番で抵抗されるとか、面倒なんだなっ！」

共犯の仲間達にせかされて、一番手であろう男は自分のムスコを取り出す。

ヒゲの生えたいい年の男だが、イチモツにも年季の分だけ相応の迫力が宿っているように見えた。

「や、えろおっ！ は—、は—、…えれる、ああっ!!! い、あっ、だあ…ト、うい、き、ああっ!!!」

一度火のついた性欲に抑制はきかない。男のペニスはぶにぶにマンコを容赦なく貫く。

「ううううううっ、あ、いっ、て…お、ないええええっ!!!」

「うっほお、ずっぱりハメたな—」

「うう、うらやましいんだな…が、我慢できないんだなっ」

ぐぢゅうとぶにマン肉をひしゃげさせ、

深々とペニスが挿入しこまれたマンコの様子に、男達はそれぞれに自分のペニスを取り出す。

「ああああ、めっ、ろ…おっ！ あっ、あっ、い、あっ、きもい…わ、る…いっっ！」

たとえチンポはチンポといえど、好きな人とそうでない人の差というだけで、気持ちはまったく異なる。

あの人を思って自慰にふけた時はあんなにエロくて気持ちよく、幸せな気分になれたというのに。

「ははは、年甲斐もなくはりきって、腰ぱっきりやっちゃうなよ？」

「さ、さっさとイクんだな。そして僕とかわるんだな！」

男達の声を聞くだけで寒気がする。

犯されている今が終わったとしても、その次がまだあると思うと絶望すら感じられた。

「おうっ、あっ、あっ…あ、めろおっ！ あ、あっ、いあ、いああっ！ わらひ…のっ、あいっなあっ！」

痺れがとれつつあるも、神経は鋭敏なままチンポの突きこみを受ける。

それがどれだけ感じてしまうことか想像は易くはない。

本来ならば攻撃に使われる電撃。見方を変えれば彼女は非常に危険な犯され方をしているのだ。

「はああっ、らめ、らのおっ！ あっ、あっ、ひっ…あ、め…ひぐうっ、いあ、かんじ…らくらひのおっ!!!」

泣き叫ぶほどにゾクゾクし、いけない気分がそそり効つ。

そんな彼らに対して危機を察知した肌は、全身で総毛立って警報をならす。

だがすでにハメられた身では感電がとけたとて逃げるのは難しいだろう。

「子宮まで届いてそうだな、この分じゃあよお」

「うおおお、こ、この娘を孕ませるのはぼ、ぼ、僕なんだなっ！ 早くイってそして交代するんだなっ!!!」

せかず外野に、男は仕方ないとばかりに腰を早める。

ぶくぶく膨らんでゆくペニスの変貌を膣で感じ取りながら、彼女の顔はますます引きつり、歪んでいった。

「い、やあああっ!!! トウキさま———ツツツ!!!!」

ドコブッ！ ドクンッ!!!! ドクドクドクドクッ…

…ドブッ!!!

実際の量はそこまで多くはないだろう。だが並々とあふれて、いつまでも止まらずに流れ出るような感覚にとらわれる。

「おー、出したな結構。久しぶりに若いのに手え出して興奮したか？」

「むぐぐぐ。ぼ、僕のオタマジャクシで必ず、かならずっ、上書きしてやるんだな!!!」

大量のザーメン——シノブの嫌悪感はその感覚の液体量に比例して増大していった。

しかもこの後、さらにチンポがぶち込まれては白濁液をぶちかまされる。

無意識のうちにすぼまった膣道だったが、すぐさま新たなチンポによってこじあけられ、無情にも射精をくらわされ続ける…



「ど、どーなってるのっ!? ほくのまた、スースーするよ!?!」

「どうやら成功のようだな」

「男だった時はどうしようかと思っただが、これはこれでいい実験になる」

フウが取り乱すのも無理はない。男子のシンボルがなくなっているのだ。

しかもそれだけではなかった。

「うわあ、何するの」

「何するのっ!?!」

フウとランがほぼ同時に同じように取り乱す。

彼女らにマグマ団が求めるものは、まさにこれからが本番だった。

「対象としては少々肉付きが足りないようだが…」

「なあに、長年お世話になるんだ、最初はこのくらいから“慣らして”おいたほうがいいってものだろう」

「やだ、ヘンなこと」

「しないでよ!」

男達に服を剥ぎ取られ、半裸になったとき、ランにもフウに起こった異変が目で見えて理解できた。

「フウ、女の子!」

「ボク、女の子!?!」

ヘンな薬を飲まされたかと思えば、その身はまぎれもなく女子になりかわっていた。

ど丁寧に女性器まで存在している。それを覗き込んで確認した彼らは、軽くガッツポーズをとった。

「よおし、よし、これはこれは…いい感じではないか」

「うむ、あとはきちんと“機能するかどうか”だな」

「恥ずかしい!」

「恥ずかしい、見ないでってば!」

割れ目を開いて膣の中まで覗き込まれ、フウは背筋を寒くする。

ランはその見本として同じようにアソコを開かれて覗く男の頭に、ポカポカとパンチを繰り返していた。

「いたた、まったく。女の子のほうか乱暴とはね。おっと今はどちらか女の子か、ハッハッハ」

「うう〜、ぼくのチンチン、かえせ!」

「あたしのおまた、ひろげるな!」

フウは足蹴りに、ランはパンチで男達に抵抗する。

だが半端に引剥かれた服が動きの邪魔をして、思うように攻撃できない。

「無駄な抵抗はやめたまえ。君たちには、我がマグマ団の未来を担う若者なのだからねえ、クックック」

「ひゃん!?! あたしの中に、指入れたっ!?!」

「あうっ!! ぼくのお尻?? 指入れたっ??」

マンコの中を指でいじくりまわすと、二人で微妙に異なる反応がかえってくる。

ランはともかく、フウにとってマンコは本来ないものだ。

穴があいているという事自体、いまだ理解に苦しむところなのに、

そこをいじくられて沸き立つ妙な感覚は、彼を困惑させる。

「あう、あう…やめてよ、ぼくのお尻の穴、いじくらないでよ!」

「ひゃう、ううんっ、お股の穴、いじくらないでよ!」

「ふっふっふ、それじゃあいじくるより、もっとすごい事をしてあげようか」

「?? なにするの」

「なににするのっ!?!」

怪訝そうな表情に、ほんのり赤らんだ頬。理解には至らずとも、カラダの反応は上々らしい。

少々強引とは思ったものの、彼らは予定どおりに二人のアソコめがけてペニスを突き刺した。

「い、いたい——!?!」

「い、いたい——!?!」

「「やだやだ、やめてっ、いたいよおっ!!!!」」

ステレオで二人同時に同じ台詞が吐き出されるあたり、感想も反応も、受けている感触や感動も同じなのだろう。

ましてや貞操を失う瞬間だ、順番に言葉を発するなどという余裕はどちらにもない。

「く、さすがに狭いな。しかし、このくらいならばっ」

ズムズムズググググ…ズゴブッ!!

「ひぎううう!!!!? ま、またが」

「さ、さけちやううう!?!」

強烈な異物感をうけて、二人の悲鳴がこだまする。

どちらもペニスを挿入されるなどはじめての事だ。

ましてや女性器をもっていなかったフウは、平常時の感覚にすら慣れていない。

「ひううっ、お、おなかきもちわるいっ」

「きもちわるいっ!!」

「じきになれてくるさ。それどころか痛み付きになって止まらなくなる、フッフッフ」

腕と同じくらいありそうな肉の棒が、股の中に10cm、13cm、15cmとハメこまれてくる。

やられる方にしてみれば恐ろしい話だ。いかにその穴がそのためにあると言われても、納得できる行為ではない。

「うえええん、こわい!」

「うわあああん、こわいっ!!」

とにかく逃げようと、カラダを左右にゆさぶりながら上へ上へと自分を上げようとするラン。

フウはお尻を前に引いて、ペニスを穴の中から引き離そうと躍起になる。

「逃げられないよ、二人とも! そうら、大人の階段のぼろうかっ」

よりしっかりと、深く突き刺したチンポ。小さな穴をいっぱいに広げながらなんとかマンコに収まっている。

だが余裕なく限界ギリギリということは、マンコの主である二人にかかる苦痛は大きくなる。

「あああっ、い、痛い! ランっ、痛いよお!!」

「あたしも痛いっ、痛いよっ、フウ、がんばろ!」

何をどうがんばればいいのかランにもわからない。

ただどこで泣き叫ぶのはあまりにも悔しいという事だけはハッキリと感じていた。

「はっはっは、こういう時は女の子のほうか強いかな? これは“その時”が楽しみだっ」

男たちはズコズコとペニスを前後または上下させている。

二人の穴を蹂躪し、一番奥のさらに小さな袋に向かって尿道の出口を合わせてゆく。

「はあっ、はあっ、あうっ、あう! ら、ラン…ッ」

「はあっ、はあっ、あうっ、あう! ふ、フウ…うッ」

互いに世界でもっとも頼りになる兄妹は、名前を呼び合って気を確かに持とうとする。

そんな健気な心を、白濁の種が覆い汚す時がきた!

ドックドクウッ! ビュドルルル!! ビュブッビュルルッ!!!

ビュグブッ! ビュゴボオッ!!! デュブッデュクンッ!!

「「ああああ————〜〜〜ッ?? 入ってる、なにかはいつてくるよっ、ぼくたち(あたしたち)の中(にっ)」」

二人に対して、男達は歯を食いしばり、しかし笑みを浮かべながら子種を打ち込み続ける。

絶対かつ確実に種が根付くように何度も何度も二人に植えつけてゆく…

——10年…

「ああっ、ああっ、ラン、ランうっ!! 止まらない、よおっ」

「はあっ、はあっ、フウ、フウうっ!! いいよお、全部受け止めるからあっ」

二人はマグマ団にいた。

さんざん子を産まされた後、フウは再びペニスを生やされ、ランとの子作りに投入される。

あらゆるケースの交配によって生まれた者たちのデータ…

未来を担う戦力の増強だけでなく、複雑で深化した研究に二人は利用されていた。